

## Iwamoto-Fujii Ambassador(2015年度)の報告

兵庫県立こども病院

小林 大介

このたび 2015 年度 Iwamoto-Fujii Ambassador として, 2015 年 5 月 9 日~24 日 Boston Children's Hospital と Toronto SickKids Hospital を訪問しましたので, ここに報告します。

### はじめに

まず本 Fellowship に応募した動機ですが, 私も兵庫県立こども病院の勤務が 20 年を超え, 小児整形外科疾患に対してはそこそこ何でもできるといった妙な慢心が心に宿るようになってきました。それに伴い, 新しいことに challenge する motivation が徐々に低下してきて, いわゆる mannerism に陥っているのではないかと思ひ始めました。これではいけないと一念発起し, 新しい世界を見たいと考えているときにこの Fellowship が設立されました。自身が国際委員会のメンバーでもあり, ちょっと厚かましいかなと思ひながらも迷わず応募しました。また, どうせ見るなら世界の最高峰をということで, この両病院を選択しました。

### Boston Children's Hospital

小児病院ながら整形外科医の数が fellow, resident を含め約 70 人, 整形外科単独での年間手術件数が約 6000 件という super aggressive hospital です(写真 1)。また, POSNA では毎年多くの演題を発表し, peer reviewed journal にも多くの article を載せている super academic hospital でもあります。亀ヶ谷先生が Hip group の chief である Dr Millis と親交が深いとのことでご紹介いただき, Observer としてカンファレンス, 手術, 外来診療を見学させていただくこととなりました。ここではまずなんとといっても Dr Millis です(写真 2)。私はこれほど強烈な個性を持った人物をほかに知りません。小柄な先生ですが, 大きなだみ声で喋りだしたら止まりません。失礼ながら半分引退された方かと思っていましたが, 朝早くからのカンファレンス, 手術日には一日中立ちっぱなしの手術, 朝から夕方までかかる外来すべてに参加しておられ, まさに現役バリバリといった感じです。御年 72 歳とのことですが, いまだ全身からアドレナリンがほとばしりていている感じでした。また親日家でもあり日本にも 4 回来られたことがあるそうで, 突然「おはようございます!」と日本



写真 1. Boston Children's Hospital の外観。まるでリゾートホテルのようです。



写真 2. Dr Millis(真ん中)に食事をごちそうになる。  
左はトルコからの observer の Dr Ali

語でしゃべりかけてきて、驚く私を見て喜んでくれるというこどものような部分も持っておられます。この Dr Millis 率いる Boston の Hip group の最も大きな売りは、Periacetabular Osteotomy (PAO) だと思えます。あまり日本では行われていない術式だと思いますが、ここでは普通に一日 2 件ほど行われています。ほかにも Surgical dislocation, Hip arthroscopy など多数多く行われており、これらの手術を見たことのない私には非常に新鮮に映りました。いずれも対象患者は 10 代後半から 20 代前半が多く、彼らは純粋な children's hip surgeon というより young adult hip surgeon の色合いが濃い group だと思えます。ちなみに Dr Millis は RAO も昔やっていたそうですが PAO のほうが手技的に簡単で術後の固定力が優れているため、PAO に変更したと言っていました。

現在、Hip の領域では FAI (Femoroacetabular Impingement) 関連の発表が大流行ですが、私には実感としてもうひとつピンとこないものがありました。実際、小児整形外科医で FAI の症状を呈する患者を診られた先生は少ないのではないかと考えています。たとえ retroversion があろうが、Cam deformity があろうが、現実に anterior impingement sign を有する患者は非常に少なく (SCFE の患者を除けば)、本当は病的な indicator ではないのではないかとさえ考えておりました。しかし、ここでは本当に FAI の症状を持つ患者が多くいました。CE 角が  $40^\circ$  くらいあり retroversion が認められる患者は本当に anterior impingement sign を有しており、これらの患者に対し reverse PAO (末梢骨片の反対移動) なる手術が行われていました。また、Dr Kim (写真 3) は人種別の大腿骨前捻角を比較し、東洋系の女性は頸部前捻角が欧米人に比べ強いいため FAI を起こしにくいのだと説明してくれました。

滞在最終日には Millis Hip Preservation Symposium というのが病院で開催され私も参加させていただきました。Closed な会ですが、Dr Schoenecker, Dr Sponseller, Dr Byrd, Dr Sanker など錚々たるメンバーが集まり、最近の pediatric hip の topics について lecture を行うというもので、非常に勉強になりました。その後の party にも呼んでいただき、豪華なフレンチをご馳走になり、Big name たちと交流させていただきました (写真 4)。

### Toronto SickKids Hospital

Boston ほどではありませんが、整形外科医の数が



写真 3. Dr Kim と握手。Kim は Millis の右腕で Hip group のナンバー 2。彼の Hip Arthroscopy はまさに秀逸！



写真 4. Millis Hip Preservation Symposium 後の party。左から 2 番目が私、真ん中が Philadelphia の Dr Sanker、右から 2 番目が Boston Children Hospital の Dr Vuillermin



写真 5. Toronto SickKids Hospital の正面入り口からの外観。こちらリゾートホテル風

fellow, resident を含め約 20 人, 年間手術件数が日帰り手術を除き 1200 超という, こちらも super aggressive hospital です(写真 5). 言わずと知れた Salter 教授が勤務しておられた病院であり, Salter 骨盤骨切り術の生みの親の病院とも言えます. 当院と SickKids には, 1968 年に香川弘太郎先生が実際にここを訪れ, Salter 教授の手術を見学されその後日本で本術式を広められたといういきさつがあります. 私もぜひここを訪れたいと思い, 病院のホームページから Observer の申し込みを直接行いました. ここでの Supervisor は Dr Gargan(写真 6)で, 昨年 UK(英国)より赴任されたとのことです. Toronto の街自体が人種のるつぼといった感じですが, この医局もスタッフにフランス人 1 人, インド人 1 人がいます. さらに現在いる 6 人の fellow にはカナダ人が 1 人もおらず UK2 人, アイルランド人 1 人, アメリカ人 1 人, イタリア人 1 人, 日本人 1 人とさまざまです. まさにワールドカップが開催できるくらい international な医局でした(写真 7). 日本にもこんな時代が来るのでしょうか? SickKids での Hip は Dr Wedge が Salter 教授亡き後, 引き継いでおられます. Dr Millis とおそらく同年代ですが, こちらは半分 retire された感があります. カナダは移民が多く, 彼らは hip の乳児健診を受けないことが多いため, Walking age の DDH (Developmental Dysplasia of the Hip) が社会問題になっているとのことです. 私の滞在中にも, 1 歳 2 か月の Chinese girl の DDH 患者が初診で来ていました. Dr Wedge は,

一昨年 JPO に publish されたあいち小児センターの金子先生の牽引療法の論文を私に見せて,

しきりに「これは素晴らしい論文だ!」と褒めたのち, 「ただし, finance 的にも custom 的にも, カナダでは受け入れられない」とも言っておられました. ちなみに滞在中, 1 歳の DDH 患者に対し内側アプローチで腸腰筋と内転筋の一部を切離し, 関節包は開けずにそのまま整復し開排位でギブス固定という手術を行っていました. 牽引で時間をかけて軟部組織を緩める代わりに, 手術で一気に切腱を行うという手技であり, 日本にはない発想だなと思いました. また, Boston でもそうですが, 新生児期の DDH 患者に対しても普通に Pavlik を装着します. 「日本では, 新生児期の脱臼股に対し Pavlik を装着すると重度の壊死を起こす可能性が高いから, 禁忌と考えられている」と説明すると「evidence はあるのか?」と聞かれ, 返答に窮してしまいました. 日本との考え方の違いの一面を垣間見た気がしました. 最後に, 本病院には spine fellow として東京大学から来られた加藤壮先生が勤務しておられ, 訪問前, 訪問中に非常にお世話になりました. 紙面を借りて御礼申し上げます.

#### おわりに

短い滞在期間ではありましたが, 今回の北米訪問を通じ, 日本との各疾患に対する治療法の違い, システムの違いを認識することができました. 両病院とも素晴らしいものでしたが, 日本にも素晴らしい点が数多くあります. また, この歳にしてこれほど exciting



写真 6. Dr Gargan(左)と fellow の Gladstein(右) Gargan 大男です!



写真 7. 私の Welcome party Dr Gargan と fellows 私の右隣が加藤先生

で enjoyable な数週間を経験できるとは思いませんでした。本 Fellowship 創設の岩本幸英先生、藤井敏男先生、川端秀彦国際委員会委員長をはじめとする日本小児整形外科学会の先生方にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。また、今後も多くの先生方がこの制度を利用し、世界に向け羽ばたいていかれることを強く希望いたします。